健康

徳大病院 元気を支える 医療

歯の修復に接着治療

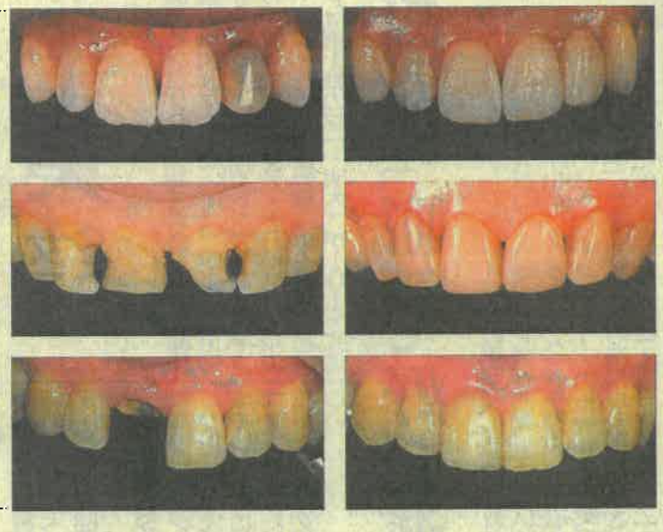
デジタル技術で高精度化

保坂啓一
むし歯科
診療科長・教授



虫歯の予防と治療において、歯や歯茎、骨などへのダメージを抑えながら必要な治療を行う「ミニマルインターベンションデンティストリー（低侵襲歯科医療）」という考え方があります。患者さんの負担を軽減するとともに、歯を健康に保つ方法として有効であり、世界的にも広まっています。

中でも、歯の色に似たセラミックとプラスチックの複合材料であるコンポジットレジン（CR）を、虫歯を削った部分や歯の欠損部分に詰める接着医療が近年注目されています。健康な歯の部分を削らずに失われた歯を再建することが可能で、機能と見た目を治療したその日に回復できます。多くの場合、麻酔の注射も必要ありません。



【左】治療前の前歯。変色や欠損などがある
【右】コンポジットレジンを用いて修復した前歯

CRを用いた接着医療は技術、素材とも進化しており、典型的な虫歯だけでなく歯のすり減り、少数の歯を失った時に両側の歯を支柱にして人工の歯を装着するブリッジ、けがなどによる歯の欠けにも対応できるようになっています。

一方で、CRによる歯の修復は、肉眼では見えないレベルの高い精度と技術が歯科医師に求められます。万が一、虫歯の取り残しや詰め物の隙間などが生じれば、虫歯が再発するリスクが高まるからです。徳島大病院むし歯科では、歯科用顕微鏡などの最新の治療設備を整えて精度を高めているほか、専門医を中心として患者さんが安心できる医療の実現に努めています。

発展が著しいデジタル技術を応用した取り組みも行っています。口の中を小型カメラで読み取り、歯や歯ぐきの形状を3Dデータ化。コンピューター支援設計（CAD）で歯の修復形態をデザインし、それを元に透明な型枠を3Dプリンターで制作してCRを流し込み、光を当てて硬化させる治療をしています。デジタル技術に関する研究成果を元に、さらなる治療のスマート化と高度標準化を世界に先駆けて進めています。

長期的にはCRと歯の境目に色が付いたり、CR自体が破損したりする可能性がありますが、状況に応じて補修すれば長持ちさせることが可能です。健康な歯を削る治療を先送りし、少しでも歯が保存できるように心がけています。

徳島新聞令和８年１１月７日掲載
コピー、転載禁止